

現場からの報告

公立中学校の現場から

坂 口 京 子

勤務校は下町の公立中学校である。全校で七クラス、生徒数二百三十名余の小規模校である。赴任して四年、授業は導入段階が勝負であるという感を年々強くしている。そこで生徒たちの興味を引き出せるかどうかとその先の授業を決める。

ここでいう導入段階とは、一時間一時間の授業だけでなく、教科書の教材に入るための準備段階のことでもある。魅力のある作品はそれ自体を子どもたちにつけることが有効であり、重要でもある。しかし、教科書教材はそういった作品ばかりではなく、概ね、内容、表現の両面において難易度が高い。これまで教科書を柱に年間の授業を組み立ててきたが、ここ数年、子どもたちの世界と教科書の世界とが乖離している現状に気づかされることが多い。したがって生徒主体の授業にするためには自主教材や補助教材を工夫し、教科書の作品と組み合わせることになる。

そうなっている原因は何か。いろいろと考えられるが、最も大きいのは語彙の問題ではないかと思う。なぜなら、学習や日常の場面において子どもたちに基本的な語彙が身につけていない傾向

が顕著になっていくからである。そのことが文章読解の直接の障害となり、教科書が読めない、理解できない生徒の増加につながっている。

たとえば、中学一年生でも「あらずじ」や「あらまし」という言葉に説明がある。「もう少し品よく言ってみようか」という同僚の声かけに「先生、品って何」と尋ねたのは二年の男子生徒。「格」「機微」「わびしい」という言葉に到っては中学三年生といえどもその世界を追体験させることから始めなければならない。

子どもたちの語彙の不足は、基本的な語彙の未定着であり、言葉の理解を支える生活経験や言語経験の貧弱さとも関連しているように思う。また、そのことは、観念的に言葉を理解しようとする姿勢とも関係しているのかもしれない。子どもたちはややもすると辞書の記述を覚えたり、別の言葉に言い換えたり、対義語や類義語を知ることによって一つの言葉を理解したと満足してしまう。

ジョン・レノン日本語を覚えるためによくデッサンをしたという。ものさびしい風景の中に、笠をかぶり着物を着た男の人が一人で歩いている絵。片隅に「wabi-iti」というメモがある。ジョン・レノンは「わびしい」という言葉の世界を理解するために、その言葉からイメージされる情景をデッサンし、その世界を追体験しようとしたのである。これは「わびしい」という言葉が直接母国語に訳せないために行ったことであろう。しかし、言葉の世界を丹念に探っていくこの営みは、言語経験が不足している現代の子どもたちにも必要なことではなからうか。

そのような状況をふまえ、授業の中でしばしば行うのがイメー

ジ化を図る学習である。新しく出会った言葉、意味を理解していると思つている言葉、読みのキーワードとなる言葉、それぞれの意味を、まず、自分自身で想起させてみるのである。文脈から類推するのはその後でもよい。まずはイメージしたものを口に出し、ノートに書いてみる、友達同士で話してみる。そうやって言葉の世界を身体や五感を通して探していく行為をあえて取り入れるのである。

三年生の古典の授業で「おくの細道」を扱ったときは、この学習が導入段階の中心となつた。教科書に入る前に「旅」と「旅行」の意味を比較し、連想したことや気づいたことをノートにまとめる学習である。

・ 「旅」と「旅行」は全く違うと思う。旅はぶらりと出かける感じで、旅行は始めから計画を立てていく。それに失敗や失恋をしたら「旅に出させていただきます」と言うけど、「旅行に行きます」とは言わない。旅の場合、出かけてしまつたら帰つてこないという覚悟がある。でも旅行は二人やそれ以上の人数でわいわい言いながら楽しく行く感じがする。

・ 一人旅、団体旅行という言葉がある。一人旅は昔なら歩いて今なら自転車かなんかで行くんじゃないかな。バック旅行や団体旅行というふうにも言うし、飛行機や新幹線で行くまで行くのが旅行。旅は北の方へ一人で行くのが合っている。

ここに挙げた例のように、ほとんどの生徒が語感や用法、意味

の違いに気づくことができている。また、友達の考えを知ることでもイメージが乏しかった生徒にも言葉の世界が見えてくる。この段階では、平易で自明な「旅」という言葉の意味を再考し、そのイメージを広げることに意味がある。

「おくのほそ道」の冒頭部で気づかせたいのは、芭蕉の考える「旅」の世界は生徒たちがイメージしている世界と重なる部分だけでなくそれを超えた部分があることである。例えば、旅自体を人生の目的と考えていることや歌枕の地を訪ねたいという気持ちなみなみならぬ旅への決意等である。このような芭蕉の思いをじっくりと味あわせたい。そこで、音読練習の後、内容を確認し、次の課題から一つを選択し、絵や文章にする学習を計画した。

○ 芭蕉の「旅」とはどういうものか。「旅」に対してどんな考えをもっているのか。

○ 芭蕉は「おくの細道」の旅にどんな気持ちで出かけたのか。ここで生徒作品を紹介する余裕はないが、芭蕉が旅の準備しながら松島の月を思い描いている場面や俳句に描かれている情景を漫画にしたもの、「旅とは人生である」と述べ、冒頭部の現代語訳を中心にとめたもの、芭蕉が語っているという設定で複雑な旅への思いをつづつたもの等、子どもたちは芭蕉の「旅」への思いをそれぞれに理解しようとしていた。

導入段階で「旅」という言葉のイメージを確認する学習は決して目新しいものではないが、その意義は大きいように思う。一つの言葉を入り口にして作品や作者の世界をより深く理解することにつながっていくからである。私自身、古典作品は独立して読み

味わうことが基本であり、そこに現代的意義を求めることには慎重な立場をとる。しかし、本来異質である作品の世界に子どもたちが迫っていくための導入として、現代文、古典作品を問わず語彙の問題に取り組んでいかなければならないのは確かであろう。そして、作品の読みに関わる言葉の学習こそが重要であり、子どもたちの言葉の世界を豊かにしていくと思ふ。

これまで、基本的な語彙の習得は、文学作品に心情移入する感性や心の襲とともに、生徒一人一人の読書経験や生活経験を通して自然に培われるものと考えてきた。しかし、子どもたちにその経験自体が決定的に不足する中、意図的かつ体験的に言葉の世界を耕していく試みが必要である。そういった学習が礎となり、読むことが楽しいと感じる子どもたちが育っていくのではないか。

(荒川区立第四中学校／早稲田大学大学院教育字研究科在

古典教育の現場から

望 月 正 秀

昨年四月から明大中野高校に縁あつて勤務させて頂くことになった。それまで教職の経験が少ない私にとって無我夢中で一年近くを通り抜けてきた気がする。現在も恥をかくことばかりである。

他の高校でも同じだとは思ふが、漢文の授業は週一時間であり、授業をつなげていくのに都合が悪いこともある。たとえば途中で

祝日や行事があるとまるまる二週間空いてしまい、中間テストと期末テストの間に授業が三時間しかとれないこともある。長い散文である場合は、どうしても何回かに渡って授業をしなければならず、前回の授業の続きを行うのに間が空き過ぎると、前回の授業で何をやったのか忘れてしまう生徒も少なくない。また、私は理系クラスの授業も受け持っているが、真面目に取り組み生徒も多いものの、理系だから漢文は必要ないと思つていたり、漢文が好きではない生徒もいる。あるとき「漢文は何のためにやるんですか」と聞かれ戸惑つてしまったことがあり、そのことについて自分で考えたり、人に聞いたりもした。今では、「高校卒業してしまつたら、もう二度と漢文を読むことはないかもしれない。しかし、将来読みたくなるかもしれない。そのために読み方を勉強しなさい」と答えるようにはしている。卒業後二度と漢文を読むことはないかもしれない、と言うと姿勢をただして授業を聞き出す生徒もいる。漢文だけに限らないだろうが、動機付けをするのは大切だと改めて感じている。古典を勉強する事で、古人の書いた物を読む事ができるようになり、自らの持つ世界が広がっていくというのはたしかにその通りだと思うが、古典を読んで面白い、納得だ、いやそうは思わないと思えるような経験をまずはさせたいと思ふものの、そのような授業はなかなかできず、自分の指導力の無さを痛感している毎日である。

現在私は、高校二年生週一時間の漢文の授業を文系理系合わせて五クラス受け持っている。一月現在やっているのは、「史記」の「鴻門之会」である。どの授業でも始めに、いつも今日の範囲

を最低一回は音読するようにしている。自分が始めに読み、区切りの良い句読点まで読み、その部分を生徒が全員で繰り返す。漢文特有のリズムや訓点の読み方に慣れるためにやっているのだが、この訓読を熱心にやるクラスも多い。このことに關しては文系理系の違いはないように思える。一人、または数人の生徒が声を張り上げて皆を引つ張って読んでいく場合や、声を出しているのが数人の場合もある。声を出している生徒は、若さゆえにもてあました力を声に出すことによつて発散させているようでもあるし、漢文独特の読み方に面白さを感じているようでもある。高校生になつて音読するのは恥ずかしいと感じる生徒も多いとは思ふが、この音読については、まずは自分が率先して声を大きくして読み、多くの生徒が声を出して読むことにならう。習慣づけていきたいと現在は思っている。漢文訓読という独特のリズムを楽しむので味わうことができれば、日本が生み出した文化の一つを学ぶことになると思ふ。

話はそれが冬休みの時期、野球部では練習試合が三月中旬までできない。この期間は基礎体力をつけるためにいろいろなトレーニングをしている。それを見ていたところ、こんな会話をしているのが耳に入った。「これを一分三十秒やると腰が痛くなるよ。」とある生徒が言うと、もう一人が「おまえ、ズルすんじやねえよ。おもしろいやりやれ。」それに対して「過猶不及だろ」と答えていた。「過猶不及」は二学期末に授業で取り上げた『論語』の一部分であつた。意外なところで漢文が使われているのに笑わせてもらったが、このように授業で習つたことに対して使う

場所を自ら見つけ出していることに彼らの意欲的な部分を見た気がした。『論語』などは非常に短い文章であり、補つて解釈しないと意味が解り辛いものであるが、生徒は意味が明快になれば、その教訓性に対して共感、または反感を自分なりに持つことができ、言葉自体が活用される可能性があることを改めて実感させられた。これがたつた一人の生徒の姿であつても、漢文の授業を行つてそれに対する反応が現れたことは、自分が授業を行つた証拠を残すことができた気がした。「何のために漢文を勉強するのか」という問いかけにも、勉強して得たものをどのように活用していくかも考えてもらふという助言も今度は加えたい。

このように、訓読を面白がつたり、『論語』の一節を会話に使つている生徒達を見ていると、彼らは授業で学んだことを楽しんで使つてみたりすることができるのである。当たり前のことにもまさら気付いた。そして、古典を教えている者として、自分自身が古典を教えるための知識だけにしていないだろうかと反省している。古典を死語としてしまわずに、実生活において少しでも用いる方法を具体的に考える必要がある。「漢文は何のためにやるんですか」これは自分自身に対する問いかけでもある。

(明治大学附属中野高等学校)

新井敏彦

二〇〇〇年三月に教育学研究科の修士課程を修了し、同年四月から現在の勤務校に勤務している。中三の学年付として、中三と高三の授業を担当している。

勤務校は中高一貫校になって五年目であり、中一から高二が共学、高三は女子校となっている。中学校が開校されてから入学してくる生徒は、小学校の時に有名進学塾に通い、受験を勝ち抜いてきた生徒ばかりである。私が担当している中三も、そのような生徒が多い。そこで『現場からの報告』として、中三の授業を通しての生徒の現状、私の考えを述べていきたいと思う。

勤務校では中学校の国語の授業は、文学（主に現代文の分野を扱う）と表現（主に古典の分野を扱う）の二科目に分かれている。単位数はそれぞれ三単位ずつである。

文学では、小説、随筆、論説、詩など、教科書に掲載されている文章のほとんどを授業で扱っている。私の方が、こんなにとくさん読んで大丈夫なのだろうか、と心配するほどである。しかし、生徒の読解力は全般的に良い。この状況の中で、いくつか気になる点を挙げていく。

まず一点目は、出川直樹の「壺」（東京書籍『新編新しい国語3』所収）という教材を扱った時のことである。授業のまとめの

段階で、課題のたすけにも出ているが、「壺」と「公園」とをどのように関連させているか、を自分の言葉でノートにまとめてみようという課題を出した。いきなりでは難しいと思い、事前に「壺」と「公園」とが、「中が無いことよって、用をなしている」という共通性を持っていることを確認した。その上で、それを踏まえて筆者の主張をまとめてほしいという意図があった。前述したように読解力は全般的に良いのでできるだろうと思っていたが、期待していたほどできなかったのである。それまで授業を行ってきた、この問題のヒントとなることは発問してきたし、事前に確認作業まで行っているのに、どうしてあまりできていないのだろうと思った。この時、「生徒は筆者の主張などを自分の言葉でまとめることを苦手としているのではないか」と思った。

二点目は、生徒は非常に点数に敏感だということである。このことは、十四、五歳という年代を考えると当然のことかもしれないが、例えば私が「漢字テスト」をします」と言うと、異常なまでの緊張感に包まれてテストを受けているのである。でき具合は個々に差はあるが、テストの点数を気にし、友人同士見せ合い、一喜一憂している姿は、赴任当初の私には非常に印象的であった。私は常に間違いが多かった漢字を板書し、注意点を明示し、生徒が訂正した漢字テストを回収し、しっかりと訂正できているかどうかを確認して返却している。生徒が点数に敏感なのはある程度は良いと思うが、点数だけしか興味がなくなってしまうと、自分の間違いをそのままにしてしまう悪い癖がついてしまう。

三点目は、文学の必要性を生徒が感じているということである。

私は剣道部の顧問をしており、部活動が終わった後、文学の授業を担当しているクラスの部員と話をしたことがあった。その生徒は、「文学で習っている現代文を読むことって、やっぱり必要ですよね」という主旨のことを言っていた。私はおそらく他の生徒もそう思っているだろう、と思った。生徒は興味からというよりはむしろ半ば必要に迫られてであるが、文学（現代文）を学習する意義を少しは感じていたのである。このことが、全般的に良い読解力に結び付く要因となつているのであろう。高三の授業を行つていて、私はふと「なぜ現代文を学ぶのだろう」と思った時があった。「誰もがなんとなく思つていることや、誰もがほとんど思いつかないことを的確な言葉で述べる。」私はそれが現代文の魅力であり、だからこそ学ぶ必要があると考えている。中三の生徒には、このことを伝えていないが、いつか機会を見て伝えたいと考えている。

次に表現であるが、主に古典を扱っているこちらの授業の理解力は低いと言わざるを得ない。このことに関して、古文に限定して以下に気になる点を挙げていく。

まず一点目は、古文特有の言い回しに抵抗感を持つている生徒が多いということである。例えば『古今和歌集』の藤原敏行の和歌で、「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（同教科書所収）を授業で扱ったところ、第二句を「メニワサヤカニ」ではなく、「メニハサヤカニ」と読んでしまう生徒がいた。判読をし、精読をした後でこのようなことがあったので、私は少しがっかりした。と同時に、言葉を正確に読むことの

難しさを思い知らされた。

一点目は、言葉から受けるイメージをふくらませる力が不足しているということである。一点目の時と同じく和歌を例にとると、『万葉集』の防人歌で、「韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして」（同教科書所収）を授業で扱った時に、「母なしにして」という状況で「置きてそ来ぬや」と思っている和歌の詠み手の心情は、どのようなものかという内容の発問をした。私はこの和歌の詠み手の置かれた状況を想像すれば、答えは出てくるだろうと思つていた。しかし、生徒からはなかなか答えは出てこなかった。三十一文字から受けるイメージ、あるいは詠まれた和歌の世界を、頭の中であれこれ考えられなかったのである。そこで私は「子を思う親の気持ち」を語っている散文ならば、生徒は考えるのではないかと思ひ、『平家物語』の「知章最期」の現代語訳をプリントにして配り、考えてもらった。しかし、生徒にとっては単なる昔のことに過ぎず、興味が持てないといった様子だった。

三点目は、「なぜ古文を学ばなければならないのか」という質問を、生徒が授業中につづけてきたことである。私はすかさず「日本人の祖先が何をどう感じ、考えてきたのかを知るために学ぶのだ」と答えた。さらに、「国際化の進む世の中で、日本人として足元を固めるために学ぶのだ」と付け加えた。私は、このように学生時代に習ったことをそのまま答えることしかできなかったが、これで十分答えになっていると思つていた。しかし、生徒は「昔のことなんてどうでもいい。今必要な現代文だけ学べばいい

い。」と言っていた。私は中世の軍記物語を専攻していたので、古文を読む意義を知っていたつもりになっていたのだ。そこで私は、自分が学生時代に専攻していた『平家物語』や『保元物語』について、生徒が分かりやすいように工夫して話をした。『平家物語』がなぜ何種類も存在するのか、といったようなことから話をした。興味なさそうにしていた生徒もいたが、多くの生徒はよく聞いていた。こうすることで生徒は、古文に対して少しではあるが、学んでみようと思うようになってくれたと感じている。

文学・表現という二科目の授業を通して、生徒の現状と私の考えを述べてきた。まずは生徒に不足している力は、文学では自分の言葉で表現する力であり、表現では古文の世界を想像する力であると考ええる。次にこの現状を踏まえて私が行うべきことは、「なぜ古文を、そして国語を学ぶのか」という大きな問題に対する答えをしっかりと持つことである。そしてそれを、機会を見て生徒に伝えることである。また、伝える際には本に書かれていることをそのまま伝えるのではなく、私自身の言葉で伝える必要があると思われる。また一方で、こういった理論的なことに加え、感動ということも忘れてはならないだろう。特に文学作品の場合は、無条件に「ここに感動した」と思えるポイントを持ちたいと考えている。

最近「学力低下」が問題となっており、『現場からの報告』という、つい現状を憂うことへ傾きがちである。文学のことについて述べた時にも触れたが、少なくとも勤務校の私の受け持つ中三の生徒の現代文の読解力は、それほど憂うべき状況にあるとは

思えない。この読解力は、今後とも向上していくように努力するのみである。しかし、既述した通り古文に関しては苦悩する日々がこれからも続くであろう。私は現状をしっかりと受けとめて、どうすればよりよい教育を行えるのか、常に「考える」ということをしていきたい。それには自分自身がいろいろな情報に敏感になり、総合的な国語の力を身に付ける必要がある。今後ともがんばっていきたい。

(渋谷教育学園渋谷中学校高等学校)

国語科として何ができるか

大屋敷 全

故郷である北海道で高校の教壇に立ち、九ヶ月余りが経った。工業高校の、しかも定時制という、自分の育ってきた高校とは全く違う環境で、教員としてのスタートを切るようになった。私の中で、「教師になったら、こういうことをしたい、ああいうことをしたい」という希望があったが、それはいわゆる全日制の「普通」の高校を念頭に置いての希望であったことに気付かされた。授業をはじめとする学校のあらゆる場面で、自分が当たり前だと思っていたことが、当り前ではないことを悉く思い知らされた。小規模の高校のため、国語科教員は私一人である。自分の思ったことを自由にできるといふ面はあるが、教科の先輩教員がいらない

というのは、辛いことも多い。専門高校における普通教科の位置付けは低く、授業時数を始め、様々な面において制約が多い。その日一日をどう乗り切るかに頭を悩ませている毎日であるが、本稿では、そういった中で私自身が感じたこと、考えたことを中心に述べていきたい。

まず第一に、対教員、对生徒間においてもいえることなのだが、生徒の発する言葉が、他人の立場を顧みない、自己中心的なものであることが多いことに驚かされた。思いやりの心の欠如ということも言えるのであろうが、自分の考え、価値観に固執して、他者の考えを柔軟に取り入れ、受容することを頑なに拒絶するのである。私は現在生徒会を担当しているが、何か物事を決めるための話し合いでも、自分の言いたいことは言うが、他人の言うことに耳を貸さないため、話し合いが進展しないのである。

人間というのは、所詮他人のことなど完全にはわからないのかも知れない。他者の立場に立つ、といっても、それは結局自分自身の価値観によって他者の立場を思いやっているのであり、他者と全く立場に立つことなど不可能なことではないのだろうか。しかし、だから他者のことを考えることは無駄だとあきらめてしまいうのではなく、例えば自分を基準としたものであっても、その中で想像力を可能な限り働かせて、他者理解に努めることが、人間生活において肝要なことではないかと考えている。国語科においていえば、小説の登場人物の立場に立つて、心情を考えることが、他者理解の視点を養う一つの例となるだろう。本校の生徒は、小学校の段階でつまづいた低学力の生徒が多く、教科書教材がなか

なか使えない状況にある。小説を読む、ということも決して容易ではないのであるが、学習方法の工夫などによつては、決して困難なことではないだろう。他者理解の視点を養うことにおいて、国語科だからこそできることがあると信じている。それを今後どう進めて行くかが、今後の課題の一つであると考えている。

また、低学力の生徒にいかにか学ぶ意欲を持たせるかについて、常に考えている。本校に来る生徒は、公立、私立とも、どの全日制高校にも入学することができなかった、不本意入学の生徒が大半を占めている。小学校の段階での学習のつまずきを、ずっと引きずったまま、入学してくる。勉強が大嫌いで、知的好奇心は極めて稀薄である。教科書教材には基本的に興味を示さない。私は状況に応じて、教科書と自作プリントを始めとする自主教材を併用しながら授業を進めているが、その中で私は教科書の在り方について、考えざるを得ない。

私の高校時代と比べても、現在の教科書は確かに変わっているというのが実感である。教材にしても、私たちの高校時代には考えられなかったような、かなり斬新なものが選定されているように思う。しかし、依然として、名作と呼ばれているもの、学術的に優れているとされているものを、教材として選定されるという、従来の概念から抜け出せていないのではないかという思いを禁じ得ない。無論、優れた言語文化を次の世代へ継承するという重要な役割を、国語科は担っている。しかし、名作と呼ばれるものに触れることに、喜びを感じない生徒にとつては、彼らの実生活の問題意識にダイレクトに触れるものを教材とするのがよいのでは

ないだろうか。そうなったときに出てくるのが、教科書検定の問題である。性的描写や差別の問題など、悪とされるニュアンスが少しでも含まれる作品は、教材として選定されない。光と陰でたとえるなら、光の部分を描いたものだけが、選ばれてしまうという現状があるのではないだろうか。陰の部分があつても、それによって彼らの問題意識が喚起されるのであれば、価値のある「学び」だと言えるのではないだろうか。そういった教材の発掘が必要となってくるだろうし、またそれをやつていかなければならないと考えている。

彼らの学ぶ意欲が低いもう一つの要因として、彼らがこれまでの学校生活の中で、よい評価を受けて来なかつたことが挙げられる。勉強に関して、褒められたことが乏しく、「どうせできないんだ」と、半ば投げやりになっている生徒が多い。授業の中で、生徒一人一人が何らかの形で活躍でき、授業に参加していることを実感できるようにしていかなければならないと考えているのであるが、実際のところ、教師主導の、一方的な講義形式の授業をやろうとしている自分に気付くのである。自分が高校時代に受けてきた授業が基準になつていて、その固定観念から脱却できていないのである。授業方法をいろいろ学ばねばと感じ、先日、勤務時間前の午前中を利用して、小学校の授業を参観に行ったのであるが、子どもたちが中心となつて、授業が展開されており、大変勉強になった。自分の中の授業間を柔軟にし、いろいろな方法を試しながら、彼らの少しの頑張りでも積極的に評価し、一人一人が授業に参加していることを実感できるように、授業スタイル

を摸索してきたと考えている。

私の勤務校は、北海道の定時制の中では比較的落ちついてはいるが、授業の成立や基本的生活習慣の指導に時間を割かざるを得ない、いわゆる「教育困難校」的な性格を有している。授業中、比較的静かなクラスであつても、やる気に乏しく、必要最低限のことしかやろうとしない。前述の通り、どこか全日制高校にも入れなかつた生徒が大半を占める中では、教育内容も、高等学校の内容とは程遠いものがある。その中で国語科としてできることは何であろうか。一つは生徒が社会に出たときに、社会生活で困らない力をつけることであろう。彼らが将来、何かを知りたい、学びたいと思つたときに、読み書きもままならないのでは、どうにもならないだろう。必要な情報を収集し、それをもとにして自分で判断する力がないと、無知であることの弱みにつけこまれて、騙されてしまう事態も想定される。学ぶ意欲が非常に低い生徒たちではあるが、何とかして彼らにその力を保障していきたいと考えている。

もう一つには、彼らの社会を見つめる視野を広め、自己成長、自己変容を促す国語科でありたいということである。様々な文章を読んだり、表現活動を行つていく中で、自己を見つめ、他者の考えを知り、今まで気付かなかつたことを発見していく。そういった場面が、国語の授業の中で生まれるような実践を行つていきたい。

思いに任せていろいろな書き連ねては見たものの、実際のところ、何もできていないのが現状である。自分の無力さを思い知らされ

る毎日である。そういった中でも、目標を見失なったり、くじけたりせず、一歩一歩教師として成長していきたい。私が早稲田の教育学研究科で学んだ意義は、国語教育に関して様々なことを学ぶ中で、学部時代では気付かなかったことが見えてきたことである。大学院で学んだことと、日々の実践をつなげ、生徒に還元できればと思う。生徒たちが、国語を学ぶことに少しでも喜びを感じてくれる実践を行うことが、私の課題であると考えている。

(北海道室蘭工業高等学校 定時制課程)

早稲田大学国語教育学会会則

(平成十年六月改正)

- 第一条 本会は、早稲田大学国語教育学会と称する。
- 第二条 本会の事務局は、早稲田大学教育学部内におく。
- 第三条 本会は国語教育に関する研究、会員相互の親睦、並びに後進の育成をはかることを目的とする。
- 第四条 本会は、前項の目的を達成するために、つぎの事業を行う。
 - 一、大会・例会・研究会・講演会などの開催。
 - 二、研究授業および授業参観。
 - 三、機関誌の発行。
 - 四、その他。
- 第五条 本会は、国語教育に関心を有する早稲田大学の教員(旧教員を含む)・校友・学生およびそれらの紹介による人々をもつて会員とする。
- 第六条 本会に、つぎの役員をおく。
 - 代表委員(一名)
 - 委員(若干名)
 - 監事(二名)
- 第七条 本会に顧問をおくことができる。
- 第八条 役員は、総会において会員のなかから選出する。
- 第九条 役員の任期は二年とする。但し、重任を妨げない。
- 第十条 本会は、会務および事業を推進するために、事務局・編集委員会等をおく。
- 第十一条 会員は所定の会費を納めなければならない。但し、学生会員は半額とする。
- 第十二条 本会は、会費・寄付金・その他によつて運営する。
- 第十三条 本会は、年一回総会を開く。但し必要に応じ、臨時総会を開くことができる。
- 第十四条 本会の会計年度は、毎年四月一日からはじまり、翌年三月三十一日をもって終わる。
- 第十五条 この会則は、総会の議決によつて変更することができる。